

木の言い分 ②①

■学校緑化の困った木

ある日、私は某小学校の五年生、約30名と学校敷地の樹木調査の為、歩いていました。知り合いの男性教師が教頭として赴任し、「子供たちに学校内の木の名前を教えてやってほしい」との依頼を引き受けたからでした。学校の植栽樹木も意外と思える程、樹種が多く、過去2校で実施した経験でも70～80種もあったことを覚えています。しかし、管理状況が良くなく、こども例外ではないようです。この市も40数年前、急激な人口増加により、学校の量的整備に追われ余裕なく、いわゆる急造を迫られたという事情があるかと思います。それにしても敷地内の樹木は、強剪定につぐ強剪定が行われてきたのが多く見られ、無残な姿になっているものが沢山あります。

樹木より児童の安全が優先というのは解かりますが、関係ないと思われる場所でもそのようなものが見られます。

学校緑化の目的は、植物など自然の材料を用いて学校の環境を美しく快適なものにし、緑を通じて人間性を養うと共に自然に対する愛着心、ひいては愛校心、郷土愛などを育成すること、とあります。いわば、教育材料の一つです。

学校当局の悩みの第一は、緑化の技術指導と適切な維持管理の実施と聞いていますが、実情は用務員に一任されていることが多いようです。これらの事からも、学校、地域、自治体三者の密接な協力が望まれます。なかでも自治体の公園緑地担当の援助が必要と思われる。そして、緑化関係の専門家も積極的に参画すべきと考えます。

歩いていると、校舎南側に常緑樹(ヒマラヤシーダ、一部サンゴジュ)がありました。これも急造の産物でしょうか？剪定はよく見られる枝の先に丸く葉が残された形です。将来の樹形、状況が判っていればこういう場所に植栽されることはなかった筈ですし、場所が適切であれば本来の雄大な姿が見られたと思います。この剪定は冬場の教室を考えてのことでしょう。しかし正面玄関前の築山に立つシンボルツリーのカイズカイブキの古木も同じような剪定がされていたのには、困ったものだ。ただでさえ学校内の樹木は走り回る子供達で土が固結された箇所が多く、健全な生育には困難な環境にあります。多くは低い柵や生垣に囲まれてはいますが、そこも踏み込まれていることが多いようです。

子供たちに話をしました。地球上の生物で樹木が最大であること、自分で移動できない、言葉を発することができないこと、そして人間の生まれるずっと前から生きてきた大先輩であること、動物は植物がいなければ生きていけないこと等。子供たちは素直に聞いてくれました。

学校に限らず、困った状況に陥っている樹木は沢山みうけられます。

＜困る＞とは、字のごとく“木”が狭い環境(地上部、地下部を含め)に閉じ込められている状態です。

樹木医 河原 英信

(NPOおおさか緑と樹木の診断協会 理事長)